

周藤彌兵衛翁物語

村尾 靖子

暗雲

彌兵衛は川普請が始まってからは、五郎太をお供に、朝は暗いうちから出掛け、夜は、すっかり暮れてから帰宅する日々が続いた。工事現場の作業小屋に泊り込むことも珍しいことではなかった。

起工式に臨む前に、家族揃って盃を交わしてから、家族で膳を囲むことも、会話を交わすことも、周藤家では、すっかり忘れられたことのようになっていた。それどころでは無い雰囲気だったのである。絶えず何かに追われるように、家族皆が忙しく立ち働いていた。

そんな中で、長男の勘六だけが彌兵衛に冷やかな目を向け川普請に関心を示そうとはしなかった。

クニは口にごそ出さなかったが、そのことが酷く気にかかった。

その朝、ゆうは、作業小屋に泊った彌兵衛と五郎太に弁当を届けに出掛けた。明け方の道はまだ薄暗く、ひんやりとした空気が、ゆうをすっぽりと包み込んだ。ゆうは、少し歩いては立ち止まり、「コッ、コッ」と乾いた咳を出し、肩で息をした。少し前から身体がだるく、ときどき、胸の奥から込み上げるような咳が出ることをゆうは、気にかけていた。

「今、私が倒れたり、寝込んだりすることは出来ないわ。お母さまに、これ以上心配を掛けることは出来ないわ。今、風邪などひいてはいられない。――」



画 寺戸良信

ゆうは自分自身を励まし、少し休んでは、また歩き続けた。額には冷たい汗が滲んだ。

ゆうは、母親ゆずりの色白で、整った顔を少し、しかめた。

向こうから近付いて来る人影が霞んで二重に見えた。やがて、ゆうは道端に、うすくまるように崩れ落ちた。

意識が遠のく中で、ゆうは村人たちの冷たい言葉を聞いた。

「庄屋さんは、ほんとうに、わしらのことを考えていなさるのだからか」

「剣山を崩したりして、龍神さまの祟りが無ければいいが……」

「ゆう、ゆう……。気がついたのか？」

「覗き込んでいるのは、兄の勘六だった。気分は、どうだ。こんなに酷い熱で、無茶をしたら死んでしまうぞ」

「お兄さま、お兄さまなのね」

「こんなことを続けていたら、今に家中の者が皆参ってしまうぞ。父上は、そんなことも全くわかっていない」

勘六は、いじも顔やかな勘六ではなかった。

「お兄さま、どうして私を見つけたの。私ね、お父さまと五郎太の弁当を届けようと思っ

て……。そうしたら急に気分が悪くなって」